

## 第八部会

## 善光寺時供養板牌における一考察

小林 順彦

近年、「善光寺時供養」なる銘を持つ板碑が埼玉県で見つかり、それについての報告がなされた。筆者はそのような板碑が存在することすら知らなかったため、それに関連すると思われる資料を集めてみたのであるが、そもそも「時供養」という言葉はどの文献にも見あたらないのである。しかし、庶民信仰として結実した板碑にわざわざ記されるくらいであるから、何らかの意味を持つてはいるはずであることは言うまでもない。以下、この小論では先学の説を整理し、それらに導かれつつ卑見を述べてみたい。

善光寺信仰は本尊である一光三尊阿弥陀如来に対して、現世安穩・後生極楽の現当二世安樂を願う庶民信仰の最たるものである。善光寺にまつわる各地の民間信仰等は、枚挙に暇がない。しかし、「善光寺時供養」という儀礼の報告は未だなされたことが無かった。そうしたなか埼玉県八潮市医王寺に所蔵される板碑と、足立区立郷土博物館に寄託されている板碑の二基が報告された。両者共に欠損しているものの、その中央には「善光寺時供養結集」の一文を読み取ることが出来る。

さて、縣敏夫氏は自身の調査を基に、これらの板碑が数有る

齋(時)念仏供養塔のなかでも比較的初期に属し、東国において孤立した存在であることを指摘している。また、「時供養」は「齋念仏供養」のことであり、その日の一昼夜に限り八齋戒を守り、念仏の勤行をすることではないかと推測されている<sup>1)</sup>。また、伊東宏之氏は、「時供養」とはおそらく時を同じくして(時を区切って)供養するという意味で、時供養という言葉が使用されたのではないかと<sup>2)</sup>いう。また、加藤政久氏は時供養は齋講供養のことであろうとする<sup>3)</sup>。その「時念仏」について中上敬一氏は、「時念仏は南北朝時代後期から昭和の今日までの約六〇〇年間続いている民間念仏信仰である。自己ないし父母の現世安穩と来世の極楽往生を願い、そのために食事を一日一食にして己が身を苦しめ、精進潔齋して一日念仏勤行を行なった逆修供養の一つである<sup>4)</sup>」といい、一日を限定して精進潔齋し、逆修供養のため行なう念仏が時念仏であると説明している。なお、坂本源一氏は「齋」という字に注目して、「時は齋で齋戒沐浴、禊のことであろうか」と疑問を呈している<sup>5)</sup>。

以上五氏の説を簡略ながら紹介したが、時供養の解釈については一致していない。これは時供養の「時」をどう理解するかによって、解釈の仕方が変わってしまうからである。これについては、前述の坂本氏の問題提起が重要である。元來僧侶は正午を過ぎてからの食事は禁止されており、正午以前の食事を齋食といい、正午過ぎは非食といった。齋食は八齋戒を保つ上で正式な食事であり、その正式の意を持つ「齋」(トキ)自体は「時」に通じ、昼夜を問わず時を決めて(本来は六時であるう)、その間は垢離精進をし、「現当二世安樂」を願う念仏供

養、則ち一種の別時念仏へと変遷したのではなからうか。但し、「善光寺時供養板碑」に記される結集の名前は、何れも先達らしき男性僧侶、もしくは阿弥号を名乗る在俗出家の禪尼を中心に、それ以外は全て女性の結集である。女性の結集に関しては未だ不明な点も多いが、本碑が重要な役割を持つことは間違いないであろう。

(1) 縣敏夫「善光寺時供養の板碑——埼玉県八潮市医王寺の新資料について」(『野仏』第三一号)。

(2) 伊東宏之「善光寺時供養板碑」について(『寺社と民衆』創刊号)。

(3) 加藤政久「時念仏と齋講との関係」(『日本の石仏』第四九号)。

(4) 中上敬一「時念仏信仰」(『日本の石仏』第六〇号)。

(5) 坂本源一「常陸国南部の大日信仰——大日塚・念仏講衆の研究」、一七五頁参照。

## 『宝性論』と『仏性論』

——如来蔵の十義における客塵煩惱——

末村 正代

『宝性論』と『仏性論』は、共に如来蔵思想に属する論書である。如来蔵思想とは、衆生に本来的に備わっている自性清浄心を根柢として、一切の衆生に成仏の可能性を認める思想であ

る。そして自性清浄心を強調するあまり、唯識派などと比べて煩惱に関する洞察が浅いと考えられている。しかしこの従来の解釈が、インド中国双方の如来蔵思想に妥当し得るかどうかという問題は、なお検討の余地があるように思われる。果たしてインドで誕生した当初から如来蔵思想は、凡夫にとってより切実で現実的である煩惱よりも自性清浄心を強調する思想だったのだろうか。今回は、如来蔵の十義における煩惱に関する部分の比較を通して、この点を考察したい。

まず、無涅槃性の者についての部分(第四義)である。『宝性論』では「性未離一切客塵煩惱諸垢。」(T31, 831ab)、『仏性論』では「不爲客塵之所染汚。」(T31, 800a)となっている。一乗すら修習していない衆生の性に関して、『宝性論』は客塵煩惱と不離という点に、『仏性論』は客塵煩惱と離れているという点にそれぞれ焦点を当てている。つまり『宝性論』は衆生を「煩惱に纏われている」という現実の側面から、『仏性論』は「仏性を持つ」という側面から見ていることが窺える。二点目は滅諦を説く部分(第五義、『宝性論』では法宝品)における『勝鬘經』の教証である。法身に関する部分は共通しているが、『宝性論』はさらに「如是如来法身不離煩惱所纏。名如来蔵。」(T31, 824a)と続ける。『勝鬘經』も『宝性論』とほぼ一致している。つまり『勝鬘經』や『宝性論』は法身を説くだけでなく、法身と煩惱が不離である在り方、如来蔵についても言及するが、『仏性論』では法身のみを説く教証となっている。三点目は如理修と如量修を説く部分(第五義、『宝性論』では僧宝品)における『勝鬘經』の教証である。ここでも『勝鬘